

## 壱岐のアクセント

添田, 建治郎  
山口大学人文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/10441>

---

出版情報 : 文献探究. 18, pp.1-6, 1986-09-18. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 土岐のアクセント

土岐アクセントの臨地調査は、二拍名詞を対象として昭和61年3月6月に行った。その際、調査語彙(二拍名詞+「ガ」)とカードに一例ずつ記し、それとゆっくり丁寧に読みだす「読む調査」法をとった。今回の報告は、その土岐アクセントの具体的な実態の一端とまとめられたものである。(1)

## 一 長崎県土岐郡のアクセントの実態

土岐郡四町の中の芦辺・石田・郷ノ浦、以上三町の大部分と占める地域での二拍名詞のアクセントは、「土岐主流式」として概ね左のごとき姿に行われている。古態を残すと目される、芦辺町箱崎中山触の石橋好衛氏(88歳)の場合と例示してみる。(2)

表1 石橋好衛(88歳)芦辺町箱崎中山触

第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
鷹 <small>トビ</small>	赤 <small>アカ</small> 門 <small>カド</small> 草 <small>クサ</small>	草 <small>クサ</small>	汗 <small>アセ</small> 息 <small>イキ</small> 板 <small>イタ</small> 糸 <small>イト</small>	藍 <small>アイ</small> 青 <small>アヲ</small> 赤 <small>アカ</small> 雨 <small>アメ</small>
蟻 <small>アリ</small> 雄 <small>オス</small> 傷 <small>イタ</small> 桐 <small>キ</small> 霧 <small>キリ</small>	皆 <small>みな</small> 重 <small>オモシ</small>	花 <small>ハナ</small> 草 <small>クサ</small>	箱 <small>ハコ</small> 白 <small>シロ</small> 海 <small>ウミ</small> 瓜 <small>ウリ</small> 笠 <small>カサ</small>	鮎 <small>アヲ</small> 蓑 <small>カサ</small> 蔭 <small>カゲ</small> 茶 <small>チヤ</small>
杉 <small>スギ</small> 鈴 <small>スズ</small> 滝 <small>タキ</small> 釣 <small>ツリ</small> 軒 <small>ケン</small> 橋 <small>ハシ</small> 嘗 <small>チカヒ</small>	杖 <small>ツエ</small> 杖 <small>ツエ</small> 杖 <small>ツエ</small> 杖 <small>ツエ</small> 杖 <small>ツエ</small>	鉾 <small>ホコ</small> 鉾 <small>ホコ</small> 鉾 <small>ホコ</small> 鉾 <small>ホコ</small> 鉾 <small>ホコ</small>	汗 <small>アセ</small> 筋 <small>スジ</small> 陽 <small>ヨウ</small> 側 <small>ソバ</small>	鉾 <small>ホコ</small> 前 <small>マエ</small> 葱 <small>ネギ</small> 肩 <small>カダ</small> 前 <small>マエ</small> 雨 <small>アメ</small>
	空 <small>ソラ</small> 種 <small>タネ</small> 罪 <small>ツミ</small> 杖 <small>ツエ</small> 中 <small>ナカ</small> 琴 <small>コト</small>		舟 <small>フネ</small> 紅 <small>ベニ</small> 松 <small>マツ</small> 嘴 <small>クビ</small> 唾 <small>ハダ</small> 垂 <small>タリ</small>	

添田建治郎

●	○	▷	◁
端 <small>ヘ</small> 星 <small>ホシ</small> 森 <small>モリ</small>	鈴 <small>スズ</small> 梅 <small>ウメ</small> 枝 <small>エ</small> 同 <small>ドウ</small> 類 <small>ルイ</small>	風 <small>フウ</small> 金 <small>カネ</small> 壁 <small>カベ</small> 酒 <small>サケ</small> 笹 <small>ササ</small>	鮎 <small>アヲ</small> 蓑 <small>カサ</small> 蔭 <small>カゲ</small> 茶 <small>チヤ</small>
	先 <small>マエ</small> 鹿 <small>カ</small> 鳥 <small>トリ</small> 西 <small>ニシ</small> 峰 <small>ミネ</small>	石 <small>イシ</small> 垣 <small>カキ</small> 紙 <small>シ</small> 串 <small>クシ</small> 蟬 <small>セミ</small>	足 <small>タラシ</small> 細 <small>ホソ</small> 犬 <small>イヌ</small> 息 <small>イキ</small> 鍵 <small>カギ</small>
右 <small>ミダマ</small> 水 <small>ミヅ</small> 道 <small>ミチ</small> 虫 <small>ムシ</small>	登 <small>ノボリ</small> 冬 <small>フユ</small> 町 <small>チヨウ</small>	足 <small>タラシ</small> 細 <small>ホソ</small> 犬 <small>イヌ</small> 息 <small>イキ</small> 鍵 <small>カギ</small>	炭 <small>ツグ</small> 谷 <small>ヤ</small> 月 <small>ツキ</small> 土 <small>ツチ</small> 時 <small>トキ</small>
	年 <small>トシ</small> 波 <small>ナミ</small> 蚤 <small>ハエ</small> 恥 <small>ハジメ</small>	桐 <small>キ</small> 梗 <small>キョウ</small> 糠 <small>カ</small> 蒸 <small>モ</small> 花 <small>ハナ</small>	節 <small>フシ</small> 緑 <small>キナンド</small> 耳 <small>ミミ</small> 指 <small>サシ</small> 子 <small>コ</small>
	隔 <small>ヒキ</small> 柵 <small>サシ</small>	沃 <small>ツク</small> 腹 <small>ハラ</small> 房 <small>ハラ</small> 山 <small>ヤマ</small> 夢 <small>ユメ</small>	
		壺 <small>ヒラ</small> 潮 <small>ウシ</small> 古 <small>コ</small> 鳥 <small>トリ</small> 霜 <small>シロ</small>	
		馬 <small>ウマ</small> 裏 <small>ウラ</small> 親 <small>オヤ</small> 肝 <small>カネ</small> 倉 <small>クラ</small>	
		新 <small>アタラシ</small> 兄 <small>ケイ</small> 脚 <small>カク</small> 琴 <small>キン</small> 蛙 <small>カエル</small>	

これら三町を中心に、広く行われている土岐主流式アクセントの現状は、  
 ○●▽ 一・二・三類  
 ○●▽ 四・五類  
 の体系をもち、筑前アクセントの一分派であって、福岡市西部域、糸島・宗像・速賀郡あたりの「筑前式」(3)



○ ● ▷		● ○ ▷	
第一類	梅枝阿闍風 壁笹騎四脚 裾底初鷹竹 桐壺爪鹿庭 箱鼻膝暇紐 笛蓋筆	第二類	恙患岩歌音 型門較川北 癖鹿下塚葛 妻旗機人皆 胸村八重
第三類	牙竿霜	第四類	汗栗息板系 箱白海瓜笠 教角鎌絹 許合鎌屑管 今朝汁筋隅側 空種界杖中 苗鑿著肌針 舟紅松嚙支
第五類	藍青赤秋兄	第五類	兩結草鑊陰 秦鯉声猿白 綴管露鶴錫 春鮎蛇前志 眉爾臂股
第三類	家池羊色腕 馬裏親肝草 倉苔事米坂 塩潮舌烏欄 純練蕙花浜 販房山夢穉 足桐犬息鏡 髮岸茶榭栗 墨炭土時毒 年波蚕恥鉢 節縁耳弓指 脇梓	第四類	朝露琴絃
第三類	鈴金酒	第五類	

勝本式アクセントは、勝本町だけでなく郷ノ浦町北部までの分布域

をもつのである。

を岐アクセントの具体的な姿と以上のように概観する。を岐主流式と勝本式は、



と共通の祖形とする兄弟の

関係、住吉式はを岐主流式からの新たな派生。を岐アクセントの現状には一・二類／三類の体系はないかもしれない。それに、を岐全体の傾向として、○●▷の発音に際して第二拍目の高音部と半拍分ほど長呼する話者が老年層に少なからずあったが、同様の傾向は九州本土の筑前域にも見出される。

二 異なるアクセント体系の衝突

まずは、狭いを岐の中での、前項にあげたごとき体系の異なったアクマントが隣接するような地帯に起きたアクセント変化の現象について、その一・二と報告しておきたいと思う。

それは、前述の郷ノ浦町長峰東触という同一地点で世代間のアクセントに差が生じてきており、若い層のアクセントが異なった姿を呈するに至った原因の究明に関わるものである。先に掲げた表は、長峰東触生と後きの老年層藤尾コナミ氏の二拍名詞アクセントであった。その姿が、同じ長峰東触でも表4の比較的若い竹尾栗氏(47歳)になると、いさゝか様相と変じてくる。第四、五類は依然として●○▷ととって老年層からの変化がないゆえ省略し、第一、二、三類の内訳だけを示す。若い竹尾氏の場合に特徴的なのは、本来●○▷ととっていたはずの第一、第二の両類に、老年層の藤尾氏には殆どみることのなかった○●▷の例が、それぞれ「鈴金酒虎暇、圓先軒右水森」//「語、歌殺川鞍下塚葛人村枝、垣幸輝冬」14語について、顔と出してくることである。第一、二類のアクセントに、何故

表4

竹尾泉(約歳) 郷(浦町) 長峰東触

第一類	第二類	第三類
梅枝 圓頰 風壁 笠鯖 皿 歌福底 袖鷹 竹桐 壺 爪 庭箱 鼻 膝 紐 笠 蓋 葎	志靈 岩音型 門北 癖 鹿 妻 旗 機 皆 胸 へ 重	牙 霜
蝨 牛 透 楚 柿 蟹 翅 傷 君 桐 霧 釘 口 首 腰 杉 鈴 滝 塵 釣 鳥 西 端 路 星 道 虫	歌 般 川 鞍 下 塚 馬 人 村 枝	家 池 芋 色 腕 馬 裏 親 肝 草 倉 苔 幸 米 竿 坂 塩 潮 吉 鳥 綱 繩 糠 菓 花 沃 腹 房 山 茅 穂
圓 先 軒 右 水 森	垣 半 蟬 冬	足 綱 犬 息 鍵 髪 岸 墨 櫛 栗 墨 炭 谷 月 土 時 毒 年 波 蚤 取 鉢 節 絡 耳 閉 ち 指 脇 棒

このように無視できない世代差が生まれてくるのであろうか。もと  
もと、長峰東触のアクセントでは、第四、五類も第一、二類と統合  
して算しく、○▽に行われていた。ところが、もっかの尾高型化●  
○▽↓○●▽の現象は、その第四、五類には全くあらわれてこず、  
第一、第二の二類所屬語にだけ著しいのである。しかも、尾高型化  
した右場//、4語の中には、アクセント変化ともたうけるような  
特定の音声環境の偏りと指摘できないのである。これらの傾向は、  
第一、二類における●○▽↓○●▽の現象が、普遍的な「音韻変  
化」によってもたらされたものではなく、隣地の異なる体系のアク

セントとの接触とくり返しつづ、その当該の○●▽と個別的に習  
得した、つまり、「形態変化に類するアクセント変化」の結果だと  
考えさせる。本来勝本式とどっていたはずの郷/浦町の北部長峰東  
触のアクセントが、これに隣接した、例えば、第一、二、三類が○  
●▽で統合しているような郷/浦町中心部あたりの優勢なアクセント  
と衝突して、それがために、長峰東側の比較的若い世代に属する  
竹尾氏などの、しかも第一、二類にだけ○●▽の増加があらわれて  
きたと解釈するのである。竹尾氏の第一類には○●●▽例が皆無ゆえ、  
東京共通語アクセントからの影響という点はなさそうである。  
それではいまま、第一、二類語での○●▽習得の事実は裏付けらるよ  
うな、具体的な内部徴証と見出しうるであらうか。表3に示した長  
峰東触生之枝きの老年層のアクセントと、左場表5のごとき長峰主  
流式アクセント(4)(末永精枝氏(約歳)郷(浦町)渡(長)西触)との接触があつた場合  
と想定して比較してみる。

表5

末永精枝(約歳) 郷(浦町) 渡(長) 西触

第一類	第二類	第三類
蝨 牛 透 楚 柿 蟹 翅 傷 君 桐 霧 釘 口 首 腰 杉 鈴 滝 塵	志靈 岩音型 皆 杖 半 蟬 冬 房 山 茅 穂	牙 霜
梅枝 圓頰 風 金 壁 酒 歌福底 袖鷹 竹 庭箱 鼻 膝 紐 笠 蓋 葎	歌 般 音 型 般 川 北 癖 鹿 妻 旗 機 皆 胸 へ 重	家 池 芋 色 腕 馬 裏 親 肝 草 倉 苔 幸 米 竿 坂 塩 潮 吉 鳥 綱 繩 糠 菓 花 沃 腹
圓 先 軒 右 水 森	垣 半 蟬 冬	足 綱 犬 息 鍵 髪 岸 墨 櫛 栗 墨 炭 谷 月 土 時 毒 年 波 蚤 取 鉢 節 絡 耳 閉 ち 指 脇 棒

組苗蓋筆	彦山夢綿
蓬柿蟹釘口因首牌先鱒石垣紙蟬旅次夏橋	足綱犬鬼鍵髮岸基櫛
杉遣鹿島西軒端星右肘登冬町雪	栗詣墨炭谷月土時妻
水道虫森	年波蚤恥鉢節縁耳聞 ろ指脇梓

長峰東融での比較的若い竹尾氏(表4)のアクセントと検するに、「飴金酒虎暇、因先軒右水森」歌般川鞍下塚馬人村枝、垣半蟬冬は、●○▽が本来の第一、二類語の中で例外的に○●▽に行われている語である。いま、それら諸語のすべてが、表5に示したを岐主流式アクセントでも○●▽ととって対応することに注目すべきである。また表4の竹尾氏では、第三類語「竿谷月聞」も○●▽に発音されるようになったが、それら4語もを岐主流式アクセントでは○●▽ととっている。これらの符合は、「長峰東融の若い世代にみられるアクセントの変異は、を岐主流式アクセントとの接触によって新たに成立したものだ」とみなす立場にとつて、きわめて好都合だと思われる。これとは逆の、「もともとの長峰東融のアクセントとを岐主流式と考へ、若い世代での新しい姿は勝本式からの影響を受けて成った」とする説は、次の内証からして成立し得ないものである。

(1) 勝本式の第一類語を○●▽ととる。○●▽ととる。長峰東融におも増加が目立つのは、比較的若い世代での○●▽である。(2) 長峰東融の若年層のアクセントは勝本式を岐主流式ではない。を岐主流式のアクセントが北上して、次第に分布領域を広げているのではあるまいか。以上のように解釈する。

続いて、を岐における異体系のアクセントの衝突例として、いま一つの事例をあげておきたいと思う。を岐の若年層にあらわれてきた、「当該地方生え抜きの本来とるべきアクセントとは異なった新に発音の傾向」について報告する。郷ノ浦町妻谷融の塚本美佐江

氏(19歳)によれば、その二拍名詞のアクセントは、  
表6  
塚本美佐江(19歳 郷ノ浦町妻谷融)

第一類	第二類	第三類
牛釘口首杉遣鹿島鼻 燈	門下妻弦裂皆(重) 胸村雪枝	足綱衣池犬色馬裏親 鍵髮草米台月雲腹耳 山夢
飴蟻梅枝漫因類柿風 蟹金壁傷名桐霧因腰 先酒笹錆皿鞆鈴裾底 袖鷹竹棚産壺釣鹿島 西庭軒箱端蜂膝暇紐 苗蓋筆墨右水道虫森	志終石右垣型般川杭 半鞍筑鹿蟬旅次馬 虹橋焚機射人	年腕鬼岸肝基櫛倉栗 苔草竿坂塩潮島鱒炭 墨谷土綱時毒年波繩 糠墓恥鉢花沢彦節縁 聞指ろ脇梓綿

概ね  
一・二・三類  
四・五類  
に行われており、第一、二、三の各類に共通した平板型化○●▽↓○●▽の傾向が著しい。同様の現象は、戸辺町深江南融の豊塔敏氏(14歳)のアクセントにも見出され、若年層全般に深く浸透してきている。を岐への流入が考えられる「平板型」○●▽ととった優勢な体系」としては、テレビ・ラジオを介した東京共通語アクセントの存在がある。東京共通語の二拍名詞アクセントは

一類	二・三類	四・五類
○●▽	○●▽	○●▽

ゆえ、第一類での最も著しい○●▽↓○●▽傾向は、その○●▽と個別的直接的に習得したものの、第二、三類にもある○●▽の増加は、第一類において著しいところの、平板型化の傾向「○●▽↓○●▽」へ類推した結果ではないだ

第一、三類にもある○●▽の増加は、第一類において著しいところの、平板型化の傾向「○●▽↓○●▽」へ類推した結果ではないだ

らうか。これもまた、異なる体系のアクセントが衝突してまたうへれたアクセント変化の一現象だと考えない。同様の平板型化傾向は、同じく筑前式アクセントの体系と有する福岡市西部域およびその近郊<sup>(3)</sup>、豊前式アクセントの北九州市などの若年層にも広く認められ、き岐とも含む二地点共通の現象で都市部に限らぬ点重要である。

注

- (1) 志岐アクセントについては次田氏の報告がある。平山博男氏『九州方言音調の研究』(福岡の指針社、昭和26年)、金田一春彦氏「対馬附 志岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対照はどうか—」(『対馬の自然と文化』(古今書院、昭和29年)、奥村三雄氏「九州諸方言アクセントの系譜」(九州文化史研究所紀要23)、岡野信子氏「志岐対馬の方言」(『講座方言学』(国書刊行会、昭和29年))など。

(2) ○は高音、低音拍と示し、▽は助詞「が」の高音、低音拍である。

(3) 福岡市中心部<sup>(4)</sup>の対照表。

○	●	▽	○	○	▽
三類		三類		四・五類	
本		後			

の体系ともしつみられる「博多式」と区別

して、このように呼称する。

(4) 第四、五類は、志岐の各地とも○▽が人気で変らぬゆえ、省略に供す。

(5) 福岡順二氏「筑前のアクセント」(『語文研究』29号)、福岡県諸方言アクセント(『語文研究』29号)参照。

(6) 岡野信子氏「福岡県の方言」(『講座方言学』)参照。

山口大学人文学部助教授

寸 懐 (I)

ロバート・キャンベル

雑誌編集者の心労は千差万別、なかでも締の切り寸前の最終修正・校正は最も勇断を要するであろう。と言っても書く側の心配も決して少なくない。千慮の一失、つまらない字句の続きぐあいや誤字・誤用のために、たとえば学者なら学者は思いがけない難儀を掛けられかねない。近世からそのまま引継いだ問題のようである。例として、文政年間から流行した学者批評書には、常套手段として微細な文体分析を行い、指示語の不明さや「刺語」・「贅語」等々論難することによって、対象の有名学者・文人の揚げ足を取る仕組になった多くのものがある。「妙妙奇談」ものの作者のなかでも、一人、「頑愚驚駭」(「芸林司会録」)と生前からの不評をかえりみず、当時の文人墨客の不学を冷笑して、しかも同じ「妙々奇談」系統のものでは自分の過を容赦なくとがめられる畑時倚(毛義、後平亭銀鷄、文盲山人、燕石楼主人などと号す)が居た。天保六年三月刊の自作「銀鷄南柯迺夢」は、書画会など文人の催し物に出没する俗輩を、たとえ「去年もさう詩人の元より筆を贈りしに、上書に『二封とかきてありしを、一人の氣いたふり大に笑ひていへるは、何等の取込ありて認しや、暁といふ字に竹冠なしとて咎の一人あり』と、「化ケ物会所」の大将に託して痛罵させ、地上の氣風を嘆かせる趣向である。これに封して、天保九年一月刊「諸家出放題」(右「芸林司会録」の作者秋田藩へ49頁へ続く)